

問1 ある博物館の「原始・古代」の展示室にて、3世紀の日本の様子を調査するために注目すべき史料や展示品の説明として、正しいものはどれですか。（2015年 岐阜公立入試 類似）

1. 中国の歴史書『魏志倭人伝』の記述と、邪馬台国の女王が魏の皇帝から授けられたとされる多数の銅鏡。
2. 志賀島で発見された「漢委奴国王」の金印と、当時の北九州の王が後漢へ朝貢したことを示す記述。
3. 飛鳥時代の政治状況を示す「古代の戸籍」の断片と、仏教伝来の様子を描いた壁画の模写。
4. 日本最古の貨幣とされる富本銭と、大宰府跡から出土した当時の外交官の記録。

問2 長崎県壱岐市の「原の辻遺跡」は、大規模な環濠集落を特徴とし、中国の歴史書に登場する「一支国（いきこく）」の王都とされています。この一支国も含まれる当時の倭国の様子や、女王卑弥呼が中国へ使者を送った出来事について詳しく記されている書物はどれですか。（2017年 長崎県公立入試 類似）

1. 『魏志』倭人伝
2. 『漢書』地理志
3. 『後漢書』東夷伝
4. 『宋書』倭国伝

問3 弥生時代に本格的に始まった稲作において、実った稲の穂先のみを摘み取って収穫するために使われた磨製石器を何というか。（2016年 奈良公立入試 類似）

1. 石包丁
2. 石鏃
3. 打製石斧
4. 石匙

問4 鳥取県の青谷上寺地遺跡などの出土品をまとめた資料では、木製品や骨角器とともに、石器、金属器、そしてこの時代の特徴的な土器が並んで示されています。これらの道具が併用されていた弥生時代の土器に見られる、縄文土器と比較した際の外見上の特徴として、最も適切なものはどれか。（2016年 鳥取公立入試 類似）

1. 表面に細目の文様がつけられ、全体的に薄手で実用的である
2. 表面に縄目のような力強い文様がつけられ、全体的に厚手である
3. 青灰色をしており、非常に硬く焼かれた朝鮮半島由来の技術で作られている
4. 仏教の儀式に用いるために、表面に金色の装飾や仏像が描かれている

問5 大陸からの技術伝来によって起きた、弥生時代の道具の変化に関する説明として正しいものはどれですか。（2018年 奈良公立入試 類似）

1. 石器から金属器への移行が進み、実用的な道具には主に鉄が用いられるようになった。
2. 青銅が農具の主材料となり、それまで使われていた木製農具は全くなされなくなった。
3. 朝鮮半島から伝わった技術により、打製石器を加工して鉄のように鋭くする技法が確立した。
4. 中国から伝わった鉄を使い、日本独自の文化である縄文土器の文様がより複雑になった。

問6 3世紀頃の日本の様子について記された歴史書に関連して、女王卑弥呼が中国の王朝である魏に使者を送った際、魏の皇帝から授けられた称号と金印の内容として正しいものを次の中から選びなさい。（2019年 茨城県公立入試 類似）

1. 「親魏倭王」の称号と金印
2. 「漢委奴国王」の金印
3. 「日本国王」の金印と勘合
4. 「征夷大將軍」の宣旨

問7 弥生時代に大陸から稲作が伝わり、食料を蓄えることが可能になったことで生じた社会の変化について、最も適切な説明を選んでください。（2021年 神奈川県公立入試 類似）

1. 土地や水の利用、蓄えた食料などをめぐって、ムラの間で争いが起こるようになった。
2. ナウマン象などの大型動物を狩猟するために、人々は移動を繰り返しながら生活するようになった。
3. 政府から農民へ平等に土地が割り当てられ、収穫した稲を税として納める制度が整った。
4. 表面に縄目の文様がある、厚手で黒褐色の土器が全国的に作られるようになった。

問8 弥生時代の遺跡で見つかる特徴のうち、当時の社会において集団間の緊張や争いがあったことを最も直接的に示しているものはどれですか。（2021年 愛知公立入試 類似）

1. 集落を二重、三重に囲む深い堀や、尖った杭を並べた逆茂木（さかもぎ）の跡
2. 収穫した稲の穂を効率よく摘み取るために使用された、平らな石に穴を開けた石包丁
3. 祭祀や宝物として用いられたと考えられる、複雑な文様が描かれた青銅製の銅鐸や銅鏡
4. 湿気やネズミの被害から穀物を守るために、柱にねずみ返しを設けた床の高い建物

問9 1世紀半ばに日本の「奴国」の王が中国へ使者を送り、皇帝から金印を授けられたという出来事が記されている、当時の中国の歴史書として正しいものを答えなさい。（2016年 大阪公立入試 類似）

1. 後漢書
2. 魏志
3. 史記
4. 日本書紀

答え合わせ・解説

問1	答え 1 中国の歴史書『魏志倭人伝』の記述と、邪馬台国の女王が魏の皇帝から授かったとされる多数の銅鏡。	3世紀の邪馬台国の時代は、文献史料を中国の『魏志倭人伝』に頼る必要があります。そこには卑弥呼が「魏」の皇帝から鏡などを贈られたことが記されており、考古学の分野で出土する銅鏡との関連が研究されています。選択肢にある「金印」は1世紀、「戸籍」や「富本銭」は7世紀後半以降のものであり、3世紀の状況を示すものではありません。
問2	答え 1 『魏志』倭人伝	3世紀の日本の社会情勢や地理、卑弥呼の統治については、中国の三国時代の歴史書「三国志」の一部である『魏志』倭人伝に記載があります。原の辻遺跡のような環濠集落の存在は、当時の倭国が多くの小国に分かれ、交易を行いつつも対立や防衛を繰り返していた社会状況を裏付けています。
問3	答え 1 石包丁	稲作が普及した弥生時代を代表する農具の一つです。当時は稲の品種が統一されておらず、一粒一粒の熟し方が異なっていたため、実ったものから順に摘み取る「穂首刈り」が行われていました。その際に使用されたのが、この磨製石器です。
問4	答え 1 表面に細目の文様がつけられ、全体的に薄手で実用的である	弥生土器は、装飾が豊かだった縄文土器と比較して、表面に細目の文様が施されるなどデザインが簡素化され、調理や貯蔵に適した薄くて機能的な形状へと変化しました。青谷上寺地遺跡のように、金属器や木製品など多様な道具が登場した背景には、稲作を中心とした計画的な生産活動への移行があります。
問5	答え 1 石器から金属器への移行が進み、実用的な道具には主に鉄が用いられるようになった。	大陸からの技術伝来により、それまでの石器を中心とした生活から、金属器（鉄器・青銅器）を利用する生活へと変化しました。これを技術革新と呼びます。鉄は非常に実用性が高く、農具や工具、武器として社会を支える基盤となりました。この変化は、食料生産の増加や集落間の争い、さらには社会の階層化にもつながる重要な転換点となりました。
問6	答え 1 「親魏倭王」の称号と金印	3世紀に邪馬台国を治めていた女王の卑弥呼は、中国の三国時代における王朝の一つである魏に使者を送りました。これに対し魏の皇帝は、卑弥呼を倭の王として認め、「親魏倭王」の称号と金印、さらに多数の銅鏡などを贈りました。1世紀（西暦57年）に奴国の王が後漢の皇帝から授かった「漢委奴国王」の金印と混同しないよう注意が必要です。
問7	答え 1 土地や水の利用、蓄えた食料などをめぐって、ムラの間で争いが起こるようになった。	稲作が普及すると、生産力の向上により食料の蓄え（余剰生産物）ができるようになりました。これにより、蓄えの多寡による貧富の差や身分の違いが生まれるとともに、稲作に不可欠な土地や水の利権をめぐって集落（ムラ）同士の争いが発生するようになりました。こうした争いを通じて、次第に多くのムラを統合する小国が形成されていきました。
問8	答え 1 集落を二重、三重に囲む深い堀や、尖った杭を並べた逆茂木（さかもぎ）の跡	石包丁は農業技術、銅鐸は祭祀、高床倉庫は貯蔵に関する特徴ですが、環濠集落における深い堀や柵（逆茂木）は、純粹に軍事的な防衛を目的としています。吉野ヶ里遺跡などでは、こうした強固な防御施設に加えて、敵を監視するための物見やぐらも確認されており、弥生時代の社会が戦乱の影響を強く受けていたことを物語っています。
問9	答え 1 後漢書	西暦57年に倭の奴国の王が使者を送り、光武帝から金印を授かった事実は『後漢書』東夷伝に記されています。江戸時代に志賀島（福岡県）で発見された「漢委奴国王」の金印は、この記述を裏付ける重要な史料となりました。3世紀の卑弥呼について記された『魏志』倭人伝とは時代が異なるため、区別が必要です。